頭を一度撫でた。
「捨て子にしては身なりが良すぎる。見たところ健康そうで栄養状態にも問題は無く、身体も服もちゃんと手入れされて清潔だ。毎日ちゃんと世話をされていないとこうはならないが、そんな親ならどれだけ困窮したとしてもまさか魔王の庭に子供を投げ捨てるような真似はするまい」
「じゃあどうして……」
「誰かが連れてきたとしか考えられないな。俺達のはずがないし、他の人間でもないだろう。ならば悪魔がやったのだろうな」
ぴく、と眉を震わせて夕夜が視線を上げる。
「悪魔？」
「おそらく悪戯好きな妖精か地霊辺りが遊び半分で連れてきたのだろう」
ナオヤが何でも無い事のように言うそばで、アツロウは顔を真っ青にしている。
「ど、どうするんですかナオヤさん。だってこんな所に子供なんか……」
「どうするって言ったってここに置いとくわけにもいかないだろ。近くの交番にでも届ければいいんじゃねーか？」
投げやりに言うカイドーも、面倒というよりはどうしたら良いのか判らないようだった。
「そういうわけにはいかん。どこの子かも解らないのに警察へ連れていったりして魔王軍が関わっているとばれたら厄介な事になる」
ベルの王が率いる魔王軍は今や日本の中枢にも影響を持つ強大な組織に成長していた。逆らう者には容赦ない制裁を下す恐ろしい魔王にこの国の人間達が逆らわないのは、おとなしく従っていれば天使の干渉から守られて封鎖以前と変わらない生活が送れるからだ。罪科のない幼子を攫ったなどという噂が立てば魔王軍への反感を煽るのは間違いない。この状況では言い逃れも出来ないだろう。
表沙汰にしない為にはこの子供の親を捜しだして問題が大きくなる前にそっと帰すしかなかった。
「親捜し、ねえ……ナオヤさん、何か策はありますか？」
「策なんか要らないよ」
低い声にアツロウはぎくりとして親友を振り返る。人間ではありえない輝きを宿した瞳が虚空を睨んでいた。そこへナオヤがおちょくるように声をかける。
「ほう、策は要らんのか。ではどうする？」
「ベルの王の命令だ！　この子を連れて来た悪魔は即刻名乗りでろ！　隠しだてする奴がいればオレの前に引き